

ミュンヘンの文学散歩（４）

佐野晴夫

17. オデオン広場周辺

王宮と宮廷庭園に挟まれたホーフガルテン通りの入り口に立つとき、正面に見える大通りは、以前に言及した国家社会主義犠牲者広場へ通じるプリンナー街であり、その先にカロリーネン広場の方尖状のオペリスクが望め、さらにその向こうには、国立古代収集館や古代ギリシャの神殿を模したグリフォテークのあるケーニッヒ広場へ通じる。また左手に堂宇に見える大きな建造物が將軍廟であり、右手にはベンツの展示場やオデオン広場のあるあたりからミュンヘン大学へかけてルートヴィッヒ街が延びている。

北側からやって来た人には、將軍廟がレジデンツ街とテアティナ街の分岐点に立ちふさがる様に見える。1841年から3年がかりで、F.ゲルトナーがフィレンツェのランツイ廟を模倣して建立したものである。L.シュヴァンターラーの設計に基づき、3室に分かれ、高い台座の上にバイエルン国で功績をのこした2人の將軍ティリイ伯爵とヴレーデ侯爵の記念像が左右に立ち、その間に、F. v. ミラー作の軍隊記念像（1892）が置かれている。階にはリューマン作の大理石製の2匹のライオン像も配置されている。ここは、宮廷庭園東部の戦士記念像および旧軍隊博物館と対をなしている。

將軍廟の右手にある壮麗な建造物は、テアティナー教会（聖カエータン寺院）である。長年待ち望まれたお世継ぎのマックス・エマヌエル皇太子の誕生（1662）を感謝して、ヘンリエッテ・アーデライデ大公夫人が献納したものであり、パレルリスの設計に基づいて、17世紀末に建立された。

將軍廟の背後の建物が、1723-28年にエフナーによって建てられたドイツ・バロック様式のプライジング宮である。王宮近くであることから、パレーというフランス語で宮殿を意味する館が、大司教館はじめ多数ある。グリーンナー街に面するアルコ・ツィンネベルク館（1820）の手前、方形のヴィッテルスバッハ広場には、選帝公であったマックスミアン1世の騎馬像が建っている。きわめて優れた擬古主義の趣味による記念像のひとつである。この広場の北側にはルートヴィッヒ・フェルディナンド館とロイヒテンベルク館があり、その東

のルートヴィヒ街に面した長方形の美しい公園がオデオン広場である。ここにも彫刻家ヴィトンの作った国王ルートヴィヒ1世の騎馬像(1862)が見える。

オデオン広場は、19世紀初頭に、市街の拡張が必要になった際、シュワピング門(1319年建設)のあったあたりの再開発にせまられた。すでにカルル・テオドールによって北方へ通ずる道路が計画され、スケルによってテアティナー教会へ導く道路が工事され(1815)、クレンツェによって王宮とテアティナー教会との間を貫く将来のルートヴィヒ街のための整備が行なわれていた。シュワピング門と著名なビアホール「パウエルンギルグル」を撤去し、その他建物の整備も行われた。オデオンとは、コンサートやバレエを催す音楽堂のことであり、クエンツェによって1826から2年かけて建てられ、一時期、音楽学校の施設の一部となったが、1944年に戦災をうけ、1954年には内務省として再建され、かつてのコンサート施設が屋内ホールと化した。今日、通常コンサートに使用されている王宮内のヘラクレス・ザールやドイツ博物館内の会議場や音楽大学の演奏ホールの音質の悪さにくらべ、ここは優れた音響をもつ伝統的な有名ホールである。だが、ここで演奏に供される回数は比較的少ない。また、現在、周辺にはバイエルン州の内務省ばかりではなく、文部省、大蔵省、農林省をはじめとする諸官庁、並びに大企業の研究所や博物館が散在している。

バイエルン王ルートヴィヒ1世が即位以前の1816年に自らの名を付けて建設したルートヴィヒ街のこの1角の館で、のちにオーストリアのフランツ・ヨーゼフ皇帝の皇妃となるエリザベートが1837年のクリスマス・イヴに誕生した。叔父の国王はローラ・モンテスに詩を捧げるほどの人物であったが、また同時に凱旋門や古代様式の柱廊を建造して新しいローマを現出させ、建物にバルコニーやジッジアを配してフィレンツェ風の家並みで新古典様式の中心地にしよう目指している最中であった。母ルートヴィカは、ナポレオンの力添えて、プファルツ選帝侯からさらにバイエルン国の初代王に即位したマックス1世(のちのマックス4世ヨーゼフ)の王女であり、ヴィッテルスバッハ家の分家のマキシミリアン公と結婚し、8人の子供をもうけた。5人の娘と3人の息子のうち、エリザベートは第3子、次女として生まれた。15歳のとき、19歳の姉君ヘレナのお見合いのため、保養地イシュルへ同行してところ、すでに18歳でオーストリア国王に即位してから5年経過した若い帝王もウイーンから来ていた。ハプスブルク家のフランツ・ヨーゼフ1世は姉君ではなく、妹君に心奪われ、求婚した。いわゆるヴィーナー・ワルツの「皇帝円舞曲」の幕開けであっ

た。姑ゾフィー大公妃はエリザベートの伯母にあたったが、姪にたいして儀礼と権威を重視する威圧的な態度を取りつづけたため、姑と嫁とあつれきが宮内内の空気を重苦しいものにした。皇太后の仕打ちや固苦しい儀式行事を回避するためか、それともヴィッテルスバッハ家一族に共通する不安定な気質のせいかわ、エリザベート皇后は専用列車やヨットを使って、ヨーロッパから北アフリカまでさすらうように、よく旅をした。皇妃が最も愛した土地がイオニア海に浮かぶギリシャのコルフ島であった。

父親マキシミアン公の旅好きな面ばかりではなく、詩人肌気質も受け継ぎ、シシの愛称で呼ばれていた14歳頃には淡い恋心と死への不安な憧れとが結びついた詩編を日記がわりに書き綴った。彼女の詩作品2編「自然に」「聖母さまに」を、ゲルマニストでもあった詩人生田春月が、「私の花環」（大正4.9、新潮社）の中で日本で最初に紹介した。

自然に

この世のものはみんな変わつてしまふ	まことといふのも空しい言葉
いつもまことの変らぬものは	けだかい自然よ、おまえばかり！
おまえにたよるものは仕合せものよ	かなしい失望を味ふことはない
おまえのまことのためならば	その慰めのためならば
わたしは何でも惜しまない ⁽³¹⁾	

この詩句を通じて、現代の映像芸術の中で見る女性像と異なる実像を見る思いがする。つまり、複雑な歴史的背景をもつマイヤーリングの悲劇の再現を試みた女優カトリーヌ・ドヌーヴの演じた人物像とも、またヴィスコンティ監督の「神々の黄昏」で従兄の狂王ルートヴィヒ2世に寄り添うロミー・シュナイダーの描く女性像とも相違する弱々しい正真のエリザベート皇后の実像が、詩篇の中で写し出されている様に思える。

オーストリア・ハンガリー二重帝国の皇后として、民族融和に心がけ、ハンガリー語を学び、多数のハンガリー人を女官に選び、賢明さと優しい人柄によって、自由と独立を求めてやまない民族主義者ラヨス・コシュートをはじめとする人々の心をとらえ、民族間の融和を図ることに成功したが、この詩句は、マジャールの温泉滞在中に、山小屋の机の上にハンガリー語で書かれたもので、これが日本の詩人によって重訳されたのである。最初にハインリッヒ・ハイネの全抒情詩を翻訳紹介した生田春月は、その研究経過の中でハイネの最高の礼讃者であった貴族女性を知り、その一点で深甚な敬意を払い、息子ルドルフ大公とマリー・ヴェツェラーとの心中事件や自らの不運な暗殺事件を含めた経

歴や業績を「詩魂礼讃」（大正10.6，新潮社）の中で、「ハイネと奥太利皇后」と題して論じた。その中で、上述の詩のほか、パリのモンマルトルにあるハイネの墓へ行啓した折の記念の詩句を添えている。

わがいためる人よ、わがついに相見ざりし人よ、
ただそのなきがらのみ、わが跪けるものにぞ懇ふ。
そが悩める魂もつひにその幸福を得ぬ、
「悩み疲れしものはわれに來れ」と
のたまへる主のみもとに今はとどまれば⁽³²⁾。

また旅先のコルフ島のアヤ・キアーヒ山麓で、デンマークの彫刻家ハッセルリスにハイネ像を大理石へ刻ませ、それを海へ向けて建てさせた。皇妃の依頼で、膝の上に置かれた手に、「そんなにわたしの目をくもらせて／一体どうしようと言うのだろうか？／このさびしい涙は昔から／わたしの目からはなれない⁽³³⁾」というハイネ詩の一節が彫られた石板が持たされている。彼女のミュンヘン時代より就寝前に愛読した「歌の本」から引用されたものである。この立像をドイツ連邦国内に移すことを計画したところ、宰相ビスマルクは、友邦国の皇后がホーエンツォレルン家を嘲笑し、ドイツを愚弄した詩人を祝賀するとは何事かと抗議したため、取りやめとなった。だが、後年、このハイネ像はハンブルクのドイツ公園内に設置された。しかし、ハイネがユダヤ人であることが理由となって、国粹主義の高揚した第2次世界大戦前に撤去された。そして、今や、フランスのツーロンに置かれたままで、ハンブルクの市民団体が署名活動を重ね、数回、州政府にハイネ像の再置を請願したが、歴代の州知事は許可の署名を拒否し、実現していない。

ふたたびオデオン広場へ話題を戻せば、この地は、アドルフ・ヒトラーの失敗に終わったミュンヘン一揆事件の現場でもある。

バイエルン王室の潜在的王位継承者ループレヒト皇太子による帝王制を画策していたアドルフ・ヒトラーは、1923年3月9日午前、ビュルガーブロイよりルーデンドッフ、ウルリッヒ・グラーフ、ショイプナー＝リヒター、ヴェーバー博士、クリーベル、ゲーリングたちとともに歌をうたい、16列のデモ隊となって警官隊の守るイーザル橋を突破し、レジデンツ街を通り、オデオン広場へ来ると、將軍廟前に警官隊が人垣をつくっていた。まず、1発の銃声が響くと、あとは激しい撃ち合いとなった。まず、ショイプナー＝リヒターが致命傷を受けて転倒し、腕を組んでいたヒトラーもまきぞえになり、腕を脱臼した。この騒擾において、死者が警官隊に3名、デモ隊にも14名でた。ヘルマン・ゲーリ

ングはじめ負傷者は大勢でた。卑劣にも、ヒトラーは大混乱に乗じて救急車で、ミュンヘンから60キロ離れたシュタッフエル湖畔ウフィングのエルンスト・ハンフシュテングルの別荘に逃れた。しかし、2日後に、逮捕されレヒ湖畔のランズベルク要塞留置所へ連行された。そして1924年2月24日よりミュンヘンのブルーテンベルク街の元兵学校の建物で反逆罪裁判をうける身となったけれども、地方裁判所の判決は要塞禁固5年の最低限の刑にすぎず、同年12月20日に執行猶予で釈放された。この間にルドルフ・ヘスに口述したのが「わが闘争」（第1巻1925、第2巻1927）である。

まだミュンヘンに来て4カ月しか経たない斎藤茂吉は、この一揆騒ぎに出会った。彼の「ヒットレル事件」の一文によれば、1923年11月8日木曜日はミュンヘンに初雪が降り積もっていた。斎藤茂吉は、午前中、医学部教室の標本をのぞいた後、リュウディン教授の臨床講義を聞き、午後は2つの講習に出席し、夕食後は、精神病学会の講演会に参席し、散会したのは11時20分であり、雪は降り止んでいたが、寒い街を霧が一面におおい、停車場前の広場では群衆が集まり、異様な緊張に包まれていたので、これを避けて帰宅した。犬の遠吠えや軍歌らしきものを歌ながら行進する隊列を幾度も寢床で聞く一夜であった。翌日、昼食時に、同時期に留学していた日本参謀部付き少佐から事件のあらましと戦略的な誤りを聞き、革命軍の失敗を知った。その後、茂吉は事件現場まで出かけている。

「威厳令の布かれたミュンヘンの街は、底に何か鬱勃たるものがあるやうで、薄気味がわるい。私等は小路を縫つてオデオン広場まで来ると、機関銃を据えた一隊の兵と、黒い毛流蘇ある抜身の槍をもつた騎馬巡査の一隊が二列に其処を固めてゐるのを見た。ルドンキヒ大街道は、電車もとまり、馬車、自動車の往反もとまつたので、うすい夜霧がこめてしずまりかへつてゐる。私は旧い国の儀式に出て来るやうな様子を一時瞠目して見たが、もう町を観ることをやめて帰宅した。⁽³⁴⁾」

この時期の大学周辺での体験は歌集『遍歴』（昭23.4、岩波書店）の中で取り上げられているが、それに先立つ「遍歴抄」で説明文とともに写實的に詠まれている。

ミュンヘンの夜寒となりぬあるよひに味噌汁の夢見てるきわれは
をりをりに群衆のこゑか遠ひき戒厳令の街はくらしも
おもおもとさ霧こめたる街にして速くきこゆる関のもろごゑ
ミュンヘンを中心として新しき原動力は動くにあらむ⁽³⁵⁾

第一次世界大戦後の膨大な賠償金支払いやインフレの狂乱振りに目をみはりながらも、国家社会主義台頭前夜のアドルフ・ヒトラーについても、ワイマール共和制の実情についてもまだ知識を持ち合わせなかった。一揆のあとで、茂吉は事件経過を調べるにとどまらず、ヒトラーの唱導する国体や対決しようとするマルクス主義や反ユダヤ主義の予備知識を得ようと書籍を注文し、読み始めた。「新しき原動力」と感じたのは、市民社会の中で、このミュンヘン一揆を契機に、ヒトラーの名前が、ドイツの国内外にも鳴り響き、迫害される党の誠実な殉教者というイメージを与えはじめたことと関連していよう。このクーデターこそ彼が国家権力の奪取を図る出発点となった。この時期において、ヴァイマル共和国体制の弱体化が反映される中で、ヒトラーはシュテファン・ゲオルゲが希望の時代の「新しい国」で表現したような「救世主」のような人物像に映ったのだろうか。

聖められた夢と行為と忍苦から
ただ一人の救世主を生み出す……
鎖をこぼち瓦礫を掃いて
秩序をつくり迷える人たちをむち打って
偉大は再び偉大に
主は再び主に紀は再び紀になる
永遠の正道に帰らせる唯一の者を生み出す、
彼は真正の象徴を民の旗印にして
嵐の中を、嵐の群の怖ろしい暁の合図の中を
覚めた白日の活動へ導き新しい国を植えつける⁽³⁶⁾。

詩人ゲオルゲは、戦争により荒廃した国土で、美への憧憬と民族の不滅と不滅の魂を結びつけて、未来への神聖な予感を形象化しようとしたものである。だが、ナチスによって、審美的象徴主義の「乱世の詩人」も戦争へ駆り立てる道具へ利用され、美的形象も歪曲化される危機に陥った。

同じ発想の利用法で、オデオン広場前は、ナチス時代になると、殉教者をまつる聖地のようになった。たいまつを燃える門より記念の行進を始め、ケーニッヒ広場では青銅の棺に永眠するあの日の犠牲者に呼びかける演説をするといった政治ショーを行うようになった。

ヒトラーと言えば、宮廷庭園に隣接した大蔵省庭園の東側に隣接するプリンツ・カルル宮 (Prinz-Carl-Palais, Königsstr. 1) について触れないわけにはいかない。

この宮殿は、1799年にミュンヘンへ移り住んだプファルツ・ツヴァイブリュッケン大公マックス1世の傅育官アベ・ピエール・サラベール(1734-1807)のために、1804年から1806年にかけてカルル・フォン・フィッシャー(1782-1820)の設計のもとで建てられたにもかかわらず、翌年、サラベールは死亡した。この宮殿は、1825年、国王ルートヴィヒ1世の弟君カルル皇太子の持ちものとなった。皇太子のなきあと、オーストリア・ハンガリー大使が居住した。1924年、この建物は、バイエルン国の首相ハインリッヒ・ヘルトの公邸として使用された。この宮殿を改築したナチスは、迎賓館として利用しようとした。1937年9月25日プリンス・カルル宮は、最も長い1日を迎える。ここにチアーノやスタラーチェら百名もの高官を随行させたイタリアのファシスト党の統帥ベニト・ムッソリーニ(1883-1945)が数時間すごしたのである。世話人たちに対して、滞在中、通訳ばかりではなく、言葉のわかる医師、理髪師、仕立て屋、マニキュア師たちやローマ間に絶えず接続確保できる電話交換手たちが手配され、またホールのテーブル上には果物、ファヒンガー水、エスプレソ・コーヒー沸かし機、コニャック、ベルモット、葉巻および両切りタバコ、細かいことではお茶のスプーンとかナプキンにいたるまでの準備が命じられた。大きなハーケンクロイツの旗とイタリア国旗が、建物より波うっていた。月桂樹の植えられた玄関前には黒色の制服と白色の帯革をつけた2名のナチ親衛隊員が銃剣をつけて歩哨に立っていた。午前、ムッソリーニがこの宮殿に到着したときの様子を「ミュンヘン新報」は、次のごとく、報じている。「プリンス・カルル宮に到着すると、すぐ、ムッソリーニ統帥は自室へ入って、ヒトラー総統の代理ルドルフ・ヘスによってプリンツレゲンテン広場の私宅にいる総統のもとを訪問するように出迎えをうけるまで、とどまっていた。この間、沢山の群衆は、イタリアの宰相をバルコニーへ呼び出そうと万歳を叫び、『ムッソリーニ総帥にお目にかかりたい』と歓声をあげる以外には、することがなかった。大衆が大喜びしたことに、ムッソリーニがバルコニーに現れ、左右へ親しく会釈しながら挨拶をする。⁽³⁷⁾」ムッソリーニは、ヒトラー総統の自宅を訪問をすませ、正午に戻ってきた。今度は、ファシスト党統帥の滞在する宮殿を、17時25分にヒトラーが訪れて会談をした。その間に、彼に総統は、彼のためだけのドイツ勲章である大十字章を授与した。17時42分に2人は道を横断して斜め向かいの「芸術の家」へ移り、展示物を見物した。ムッソリーニは、この美術館に1時間もいなかった。19時10分には特別列車でベルリンへ向かった。

エチオピア戦争につづくスペイン戦争へ派兵する中で、ムッソリーニは独伊同盟を反ボルシェヴィズムに終わらず、全ヨーロッパの枢軸にしようと同策するヒトラーとの会談に臨んだのである。やがて、この同盟策は、さらに1937年10月6日に日独と防共協定を締結することで完成した。その意味で、ここが日独伊の3国同盟の締結を促し、不幸な大戦へと導いて行く契機を与えた最初の建物となったのである。

18. シュワーピングの入り口

さて、ここであってシュワピング門があった場所に立ち戻ろう。1854年4月20日木曜日、バイエルン公爵家の聖堂でミサをすませ、エリザベートが6頭立ての無蓋馬車にのり、宮殿正門から、オデオン広場前を経て、住み慣れた自分の館のあるルートヴィヒ街にさしかかると、沿道ではシシに別れを告げる民衆で溢れていた。群衆の歓呼に答えながら、フィレンツェ風の屋敷街をぬけ、聖ルートヴィヒ教会前を通り、ネオ・ロマネスク様式の大学を左右に見ながら、ローマのコンスタンチヌス凱旋門を模して1850年に建造されたジーゲストールをくぐり、パレードは進む。ミュンヘンからウイーンまで約3百キロ、馬車で約30時間の距離である。行く村や町の歓迎と祝賀を受けながら2泊3日の行程である。バイエルン王国の国境の地である水都パッサウでオーストリア政府高官や宮廷人から公式に皇后として出迎えられた。三国一の花婿フランツ・ヨーゼフ皇帝が、待ちわびて、リンツまで来ているのを新しい皇妃は知らなかった。

われわれも、シュワーピングへ出かけよう。ゲルマニストならば、一度は耳にしたことのあるシュワーピングの地域とは一体どこなのか。かつては、ルートヴィヒ街から左回りしながら言えば、オウ・ファウ・ミラー環状道路、ブリーナー街、バーラー街、アードルベルト街、キュアフルステン街、ノールトエント街に続くベルグラード街、カイザー街、レオポルト街に囲まれた比較的狭い地域を指した様であるが、今日、行政区域としては、オデオン広場に近い街区は含まない。ルートヴィヒ街から出発して、ミュンヘン工科総合大学に面したテレジア街へ曲がり、マスマン街からダッハウアー街へ折れて、動物病院近くのオリンピック競技場を北上し、自転車競技場脇のヴィリィ・ゲープハルト河川敷を通過してランツフーター大街道へ進み、高速鉄道のオリンピア・スタヂオン駅から右へ枝別れした支線に沿って、ミルベルツホーフェン駅やフライマン駅を経て、そのまま東のライントーラー街へ進んで行くと、イー

ザル河にぶつかる。この河の上流である南へ歩み、イギリス庭園内のクラインヘッセローエル湖と中国の塔との中間を西に横断してオーム街へ出て、小刻みにカウルバッハ街、シャック街、そこより凱旋門のあるレオポルト街に出る。そこより大学本部うらを一周するために、アーダルベルト街より裏のアマーリア街とシュリング街を通してルートヴィッヒ街へ出て、シュワピング区域を一週したことになる。

なお、余談ながら、最後に通った大学脇のシュリング街には、ヒトラーが政権を奪取したあと、ミュンヘンで生まれ育ったナチス党の本部が置かれ、君臨していた事実も忘れてはならない。

ヒトラーもオーストリアからやってきた他国者であったが、ミュンヘン大学、ミュンヘン工科総合大学、ミュンヘン音楽大学の学生たちをはじめ、まだ世に出る前の他郷から訪れた演劇家、画家、小説家、歌手たちをシュワピングは快く迎え入れてくれる街区である。芸術家や教養人は、ミュンヘン児を俗物市民呼ばわりすることがよくあるが、これに対してシュワピングの住民は、文化的にコロニーの居住者の様な関係にある。根からのミュンヘン児でなく、すでに見たガイベルやハイゼばかりではなく、ゲオルグにしても、マン兄弟やリルケたちにしても、他国者意識を捨てきれなかった詩人たちである。土地の詩人トーマ等は例外的現象であり、ドナウの支流イーザル河の河畔に栄えたミュンヘンの文化は異邦人が創り出し、定着させたと主張したとしても、過言ではない程である。

未完

1993.4.6

注

- (31) 生田春月「私の花環」(大9.9, 新潮社) P. 259.
- (32) 生田春月「ハイネと奥太利皇后」(「生田春月全集」第9巻所収, 昭6.11, 新潮社) P. 204.
- (33) Ibid. P. 203.
- (34) 斎藤茂吉「ヒットレル事件」(「斎藤茂吉全集」第8巻所収, 昭27.6, 岩波書店) P. 439.
- (35) 斎藤茂吉「遍歴抄」(「斎藤茂吉全集」第20巻所収, 昭27.6, 岩波書店) P. 128.

- (36) シュテファン・ゲオルゲ／野村琢一訳「乱世の詩人」(「世界名詩集大成」第7巻昭33.12, 平凡社) P. 215.
- (37) In : »Die Münchner Neuesten Nachrichten« (am 26. September 1937).